

令和 4 年 6 月 27 日現在

機関番号：35302

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2021

課題番号：17K04657

研究課題名（和文）近代日本のキリスト教系幼稚園における音楽活動に関する研究

研究課題名（英文）Music Education in Christian Kindergartens in Modern Japan

研究代表者

井本 美穂（Imoto, Miho）

岡山理科大学・教育学部・准教授

研究者番号：40780705

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、明治期から大正期のキリスト教系幼稚園における音楽活動の特性について、当時の米国の幼稚園における音楽活動との関わり観点から明らかにすることを目的とした。

研究の結果、（1）フレーベルの教育思想を理解したうえで、進歩主義教育を基盤とした米国の音楽活動の手法が積極的に取り入れられていたこと、（2）音楽活動のなかで他者と繋がることを通して、創造性および自立心の育成がめざされていたこと、（3）人間形成の手段として、音楽にあわせて自由に身体表現する活動が展開されていたこと、が明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は、明治後期から大正期の日本のキリスト教系幼稚園の音楽活動について、米国の幼稚園における音楽活動との関連性という観点から考察したことにある。特に、キリスト教系幼稚園における音楽活動の手法に、フレーベルの教育思想および進歩主義教育がいかに反映されていたかを明示したことにより、当時のキリスト教以外の幼稚園における音楽活動との相違点に関する新たな視角を提供することができた。また、当時のキリスト教系幼稚園の音楽活動の分析をとおして、幼児教育における音楽活動の価値を提示した点は、現在の幼児教育における音楽活動の意義を再確認するうえでも有効であると考えられる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to clarify the characteristics of music activities in Japanese Christian kindergartens during the Meiji and Taisho periods by focusing on its relationship with the music activities in American kindergartens in those days. As a result of examination, the following three characteristics became clear: (1) the methods of American music activities based on progressive education were actively adopted based on an understanding of Froebel's educational ideas, (2) the development of creativity and independence were aimed at through connecting with others in musical activities, and (3) activities for free physical expression to music were developed as a means of character-building.

研究分野：音楽教育

キーワード：幼稚園 キリスト教 創造性 身体表現 新教育思想

1. 研究開始当初の背景

明治・大正期の幼稚園における音楽活動に関する研究は、これまで東京女子師範学校附属幼稚園をはじめ、主に公立幼稚園における音楽教育を対象として蓄積されてきた。一方、主に外国人宣教師によって設立されたキリスト教系幼稚園については、公立幼稚園にはみられない独特な音楽活動が行われたとされているが、その音楽活動がどのような特徴を持ち、いかなる実践を行っていたかは断片的にしか明らかにされていない。

近年の幼児教育史の分野では、明治後期から大正期のキリスト教系幼稚園において、米国の新教育思想を基盤とした先進的な教育が実践されていたことが確認されており、幼児教育史上におけるキリスト教系幼稚園の重要性が指摘されている。そのため、音楽活動の内容においても、米国からの影響を受けていたことが考えられる。

そこで本研究では、明治後期から大正期の日本におけるキリスト教系幼稚園の音楽活動がどういった特性をもっていたのかについて、当時の米国の幼稚園における音楽活動との関連性に着目して研究課題を設定した。

なお、本研究では、幼稚園の保育のなかで行われる、音楽を伴う活動を「音楽活動」として捉え、聴取、歌唱、音楽に合わせた身体表現、歌の創作、楽器演奏を含むものとした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、明治後期から大正期のキリスト教系幼稚園における音楽活動の実践内容を探り、それが当時の米国の幼稚園の音楽活動といかに関わっていたかを調査することにより、当時のキリスト教系幼稚園における音楽活動の特性を明らかにすることである。

本研究の課題は以下の3点である。

- (1) 明治後期から大正期のキリスト教系幼稚園における音楽活動の内容を明らかにする。当時、公立幼稚園とは異なる楽譜が用いられていたとされるが、どのような曲を用いて音楽活動が実施されていたのかについて、史料を収集し考察することによって明らかにする。
- (2) 当時のキリスト教系幼稚園における音楽活動の基盤となっていた教育理念を明らかにする。特に、キリスト教系幼稚園と関わりの深い米国の幼稚園の音楽活動に関する史料を収集し、キリスト教系幼稚園の音楽活動との関連性について分析する。
- (3) キリスト教系幼稚園の音楽活動が、日本の幼稚園の音楽活動に与えた影響を探究する。キリスト教系幼稚園とキリスト教以外の幼稚園および日本の幼児教育関係者との交流の状況および情報交換の様子について、得られた史料から当時の様相を示す。

3. 研究の方法

本研究では、明治・大正期のキリスト教系幼稚園に関する一次史料(楽譜、日誌、雑誌)を収集・分析するとともに、分析対象とするキリスト教系幼稚園に勤務していた宣教師の母国である米国の幼稚園における音楽活動についても史料を収集し、調査した。具体的には、キリスト教系幼稚園および公立幼稚園において実際に用いられていた遊戯曲を収集し編纂された『京阪神幼稚園遊嬉』(1912)を分析し、キリスト教系幼稚園と公立幼稚園で用いられていた曲の特徴を把握した。また、頌栄幼稚園、広島女学校附属幼稚園、遺愛幼稚園の3つのキリスト教系幼稚園、および日本のキリスト教系幼稚園に勤務する宣教師によって結成された日本幼稚園連盟(Japan Kindergarten Union, 以下JKU)を取り上げ、キリスト教系幼稚園における音楽活動の内容を明らかにすることを試みた。

当時の米国の幼稚園における音楽活動については、米国の幼児教育雑誌、幼児教育専門組織IKU(International Kindergarten Union, 以下IKU)が発行した標準カリキュラム、保育者養成校のシラバスなどを調査し、当時の米国の幼稚園における音楽活動の内容を明らかにした。

そのうえで、日本のキリスト教系幼稚園の音楽活動と米国の幼稚園における音楽活動との関わりについて考察した。

キリスト教系幼稚園の音楽活動が日本の幼稚園の音楽活動にいかなる影響を与えたのかについては、保姆の交流記録および雑誌記事等を精査することとした。

4. 研究成果

研究目的のうち、(3)については、史料的制約に加えてコロナ禍で史料収集が困難となったため、完全には達成することができなかった。そのため、米国の幼稚園における音楽活動との関連性を深く考究することに注力した。

(1) 『京阪神幼稚園遊嬉』にみるキリスト教系幼稚園と公立幼稚園の音楽活動との相違点

日本に幼稚園が導入された当初、フレーベルの教育は導入されたが、その原点となる神の信仰に関わる内容は伝えられなかった。音楽についても、フレーベルの『母の遊戯・育児歌』の歌詞の内容は援用されたものの、旋律は日本で新たにつけられた。西洋の曲も導入されたが、歌詞は万葉集から抜粋するなど、原曲とは違う語句がつけられ、和洋を折衷し日本国独自の歌を作ることがめざされた。すなわち、フレーベルの教育理念に沿って作成された西洋の曲が直接用いられていたわけではなかった。

1912(明治45)年に編纂された『京阪神幼稚園遊嬉』には、当時京阪神の幼稚園で実際に用いられていた遊戯曲が所収されている。この曲集を分析した結果、当時のキリスト教系幼稚園とキリスト教以外の幼稚園における音楽活動には次の相違点を見出すことができた。

本曲集に所収されているキリスト教以外の幼稚園で用いられた曲では、遊戯の際の動きが定められていた。例えば、前後に進む歩数や、飛ぶ動作をする回数が決められていたほか、歌詞の内容を模倣したものではない「拍手」をする動作も数か所にみられた。これらの動作が用いられた背景として、当時の京阪神連合保育会での研究会において、「歌を伴う遊戯については一定の基準の基に様々な運動をさせて心情を快活にし、身体の健全をはかり共同の心を養うようにすること」と記されていることから、京阪神地域の幼稚園では、決まった動作を同時に行うことで「共同の心」を育成することをめざし、音楽活動が実践されていたのではないかと考えられる。

一方で、キリスト教系幼稚園の曲については、米国の曲が用いられ、リズムに合わせることを基本とし、曲調に留意した内容となっていた。また、曲に合わせて子ども自身が自由に表現する部分が設けられていた。曲集編纂の説明において、「遊戯は自分の内面を表すことができる活動であること、外界と調和する源となる活動でもある。遊戯を行うなかで、純潔・温和・勤勉・創造性などの人間性を獲得していく。こうした人間性を形成する過程で、家族および自然、さらには神に対する態度も育成される」というフレーベルの文言が引用されており、以上のようなフレーベルの教育理念をふまえて音楽活動を行っていたと捉えることができた。

(2) 米国の幼稚園および保育者養成校における音楽活動の内容

明治後期から大正期にあたる19-20世紀転換期の米国の幼稚園における音楽活動の実践状況および課題とされていた事項について、当時の幼児教育雑誌に掲載された音楽に関する記事を調査した。これらの雑誌においては、幼稚園で用いる歌に関して、幼児に適した歌とはどのようなものかについて議論が行われており、歌詞の内容のみでなく、声域・音程・フレーズ・リズムなどの面から多角的に検討されていた。また、歌を創作する活動および音楽を聴いて感受したことを身体で表現する方法などの記事が多くみられ、子どもが自発的に行う創造的な表現活動が着目されていた。さらに、このように幼稚園の音楽活動が多様化するに伴い、幼稚園教員の音楽能力を向上させる必要性が指摘されていた。こうした幼稚園の状況および幼児教育関係者の課題意識を背景に、幼稚園教員養成校での教育の在り方についても改善が求められていたことが、雑誌の分析から明らかとなった。

また、日本の幼稚園で保育を実施した宣教師との関わりが深いコロンビア大学ティーチャーズ・カレッジおよびシカゴ大学教育学部幼稚園教員養成コースの授業内容の変遷を辿った結果、両大学においては、20世紀初頭にフレーベルの教育理念を基盤とした授業内容が減少し、進歩主義教育の理念を基礎とする授業へと変化を遂げていた。

音楽活動については、コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジ幼稚園教育学科の音楽授業内容および幼稚園教育学科のヒル(Hill, P.S.)が編纂した『コンダクトカリキュラム』(*A Conduct Curriculum for the Kindergarten and First Grade*, 1923)において、リズムに合わせた身体活動、および歌詞の創作、鑑賞がカリキュラムに位置づけられ、自発的な表現活動が重視されていた。また、集団活動をとおして社会性を養うとともに、子どもの個性を尊重する姿勢がみられた。その背景には、主体的に物事にに関わり、民主的に問題を解決できる米国民になるための習慣形成の意図が込められていた。

シカゴ大学の幼稚園教員養成コースにおいて、1910年まで音楽授業を担当したスミス(Smith, E.)は、フレーベルの教育理念に基づき、進歩主義教育の手法を取り入れた音楽活動を行っていた。スミスは、子どもが自己に内在する情動を表現することに音楽活動の役割を見いだしていた。そのため、従来行われてきた音楽技能の基礎訓練から知識を得るのではなく、歌うことによって、その音楽を特徴づける要素を体感する音楽活動を実施することをめざしていた。また、子どもから自然に生み出された旋律を尊重し、その旋律をもとに作曲する技能をもつ教員を育成しようと試みていた。

IKUによって米国で初めて作成された幼稚園の標準カリキュラム『幼稚園カリキュラム』(*Kindergarten Curriculum*, 1919)および『幼稚園と第1学年のカリキュラム』(*A Kindergarten-First-Grade Curriculum*, 1922)では、幼稚園の音楽活動の主要な役割として、歌唱をとおした社会性の育成、身体表現をとおした自己表現力および身体統制力の発達、および創作による創造性の向上が示された。リズムに着目した身体表現および創作は、幼児が自己を外部に表す手段として重視されていた。音楽を受動的に聴くのではなく、感受した音楽を身体で表現することをとおして、創造性を養うとともに、個性を認識する役割を音楽活動が受け持っていたと考えられる。こうした19-20世紀転換期の米国の幼稚園における音楽活動は、個性を尊重しつつ創造性・社会性を育成することを志向する進歩主義教育を反映した内容となっていたと捉えることができた。

(3) 日本のキリスト教系幼稚園および保育者養成校における音楽活動の内容

頌栄幼稚園については、シカゴの幼稚園に勤務した後來日し頌栄幼稚園および保母伝習所を設立したハウ(Howe, A.L.)が編纂した『幼稚園唱歌』(1892)『幼稚園唱歌続編』(1896)を分析対象とし、ハウの著作物、母校であるシカゴ・フレーベル協会幼稚園教師養成所(The Chicago Froebel Association)での学習内容などをふまえて、本曲集で意図された幼稚園における音楽

活動の役割について考察した。

キリスト教系保育者養成校における保育者養成では、実践のみでなく幼稚園教育の理論が重視され、フレーベルをはじめ多様な教育家の教育理念が学ばれていた。さらに、フレーベルの教育理念の根底にあるキリスト教の思想についても理解を深めることがめざされていた。

『幼稚園唱歌』『幼稚園唱歌続編』には、米国で編纂された曲集から抜粋された曲が用いられ、フレーベルの教育思想に基づき、それぞれの歌に教育的な意味が付されていた。両曲集には前述のシカゴ大学で教鞭をとっていたスミス (Smith, E.) の曲が多数所収されていた。ハウがシカゴ・フレーベル協会保姆養成所に在籍していた期間、スミスは同校の音楽授業を担当しており、ハウはその際にスミスから幼稚園における音楽活動に関する知識および方法などを吸収し、日本の幼稚園における音楽活動に生かしたと考えられる。両曲集における音楽活動の特徴は、歌詞による知識や道徳に関する内容の伝達、フレーベルが求めていた調和を曲調で表現すること、およびリズムにより情動を喚起することであったと分析することができた。

広島女学校附属幼稚園は、米国の新しい幼稚園教育の理念および方法を直接学んだ教員を有し、その教育内容を幼稚園の活動に組み込んでいた。コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジで学んだフルトン (Fulton, J.F.) が編纂した『遊戯唱歌』(1915) は、附属幼稚園児の日々のあそびを観察し、子どもたちの活動に合う楽曲を海外の曲集から選定していた。『遊戯唱歌』における音楽活動の特徴は、リズムに重点をおき、楽曲の曲調によって子どもの情動に働きかけ、身体による自己表現へと導くこと、幼児が自由に歌詞を作ることにより子どもの興味や関心を高めるとともに、創造性を向上させること、子ども同士が表現を模倣し合い、子どもの自己表現を個人の表現として完結するのではなく集団で共有する機会を設けることにより、他者を受けとめる態度を育成しようとしていたことであった。本曲集にみられる広島女学校附属幼稚園の音楽活動の特性は、子どもの興味・関心を起点とした指導法や教材を用い、主体性・創造性をもった人間を育成する役割をもっていたことであるといえる。

米国メソジスト監督派教会の宣教師が設立した北海道函館市に所在する遺愛幼稚園では、日誌に記載された曲目と幼稚園に残された楽譜から、祈禱歌をはじめ、日々の保育のなかで、子どもを多様な音楽に触れさせていたことが明らかとなった。音楽活動に用いた曲は、米国の宣教師から借用した楽譜、および『幼稚園唱歌』『遊戯唱歌』といった、キリスト教系幼稚園において編纂された曲集のなかから選曲されたものが多くみられ、米国の音楽をとり入れた音楽活動が行われていた。ただし、天長節などの行事に用いられた曲をはじめ、日本で作曲された曲も歌われており、米国のみの音楽を用いていたわけではなく、目的に応じて日本の曲を採用していた様子がみられた。保育内容としては、大正半ばまでは中心統合法を取り入れた保育を行っており、音楽活動に関しても、設定されたその日のテーマに基づいて曲が選択されていた。遊戯においては、大正半ば以降、扱った曲が法則や秩序を学ぶことを目的とした曲から創造性を身につけることを目的とした曲へと変化していること、遊戯の曲が増加していることから、大正後期に遺愛幼稚園で保育の内容がより創造的な教育をめざすものに変化していた可能性があることを見出した。

JKU の音楽活動に関する取り組みについては、年次総会の議事録および JKU が刊行した『幼稚園の遊戯歌』(1921) を中心に分析した。JKU は、日本のキリスト教系幼稚園の宣教師が幼児教育に関する様々な事項について教派を超えてお互いに協議し、情報交換をする機関として、1906 (明治 39) 年に設立された機関である。JKU は IKU の支部ともなっており、米国の情報を逐次入手していた。JKU の会員は、宗教的な視点から音楽を重視し、人間と神を結びつける鎖の一部であると捉えていた。JKU の会員にとって、幼稚園における音楽活動は、神とつながるうえで大きな役割を担っていたといえる。

『幼稚園の遊戯歌』には、米国の曲集から選定された、身体表現を用いることを意図した曲が多数含まれていた。本曲集の特徴は、歌詞および動作を考える部分を設け、身体表現することにより、子どもの興味・関心を高めるとともに、創造力の育成をめざしていること、子どもが考えた身体表現を他の子どもが模倣し、子ども同士でアイデアを共有することにより、自分の表現を再確認するとともに、自己と他者とのつながりの中で社会的な経験をすることを志向していること、他者と協同して身体表現を実践することを通して、社会性を培うことを志していることが挙げられた。こうした主体性および創造性に重点をおく JKU 会員の思考の背景に、IKU の『幼稚園カリキュラム』など、20 世紀初期の米国における幼稚園の音楽活動の影響がみられた。またその根底には、本曲集を編纂した宣教師がめざした幼稚園の音楽活動に対する認識すなわち、自分の身体を用いて外部に働きかけ、新しいものを生み出していくこと、および音楽活動とおして他者との関係を築くことが反映されていることが明らかとなった。

以上の分析結果より、明治および大正期の日本のキリスト教系幼稚園における音楽活動の特性として、以下の点を指摘することができた。

第一に、キリスト教信仰を基盤とし、音楽活動とおして人間形成をめざし、歌詞のみでなく曲調とおしてその目的を体現しようと試みていたことである。その人間形成の基盤となっていたのは、神を崇拝すること、他者を愛する心を育てることであり、幼稚園における音楽活動の大きな役割は、神および他者とのつながることであったと捉えることができた。

第二の特性は、身体を用いた表現活動を人間形成の手段として積極的に取り入れていたことである。キリスト教系幼稚園における身体表現の主な目的は、音楽を受動的に聴くのではなく、感受した音楽を身体で表現することとおして、創造性を養うこと、および他者とのつながること

であった。すなわち、身体表現と主体性および創造性の育成は不可分の関係であったといえる。そして、この身体表現の目的は、当時の京阪神の公立幼稚園で目的とされていた精神を快活にすることや身体能力の向上とは異なるものであった。

以上を総括すると、明治期から大正期の日本のキリスト教系幼稚園では、米国から来日した宣教師が主体となり、フレーベルの教育思想を理解したうえで、米国の進歩主義教育の方法を柔軟に取り入れた。これにより、当時の日本のキリスト教系幼稚園の音楽活動において、他者との繋がりをとおした自立心の育成・創造的な表現・自由な身体表現が実現したと考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 井本美穂 | 4. 巻 57 |
| 2. 論文標題 シカゴ大学における幼稚園教員養成カリキュラム：20世紀初期の音楽領域を中心に | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 岡山理科大学紀要. B, 人文・社会科学 | 6. 最初と最後の頁 71-81 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------|
| 1. 著者名 井本美穂 | 4. 巻 27 |
| 2. 論文標題 近代キリスト教系幼稚園における音楽活動にみる身体表現 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 国際幼児教育研究 | 6. 最初と最後の頁 - |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34567/iaece.27.0_21 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 井本美穂 | 4. 巻 62 |
| 2. 論文標題 大正期の遺愛幼稚園における音楽活動 | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 中国四国教育学会編『教育学研究紀要』第62巻 | 6. 最初と最後の頁 275-280 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

| |
|---|
| 1. 発表者名 井本美穂 |
| 2. 発表標題 音楽活動における身体表現の可能性 - 大正期広島女学校保姆師範科の実践に焦点をあてて |
| 3. 学会等名 日本音楽教育実践学会中国支部例会 |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 井本美穂 |
| 2. 発表標題 20世紀初期のシカゴ大学における保育者養成 - 音楽領域に焦点をあてて - |
| 3. 学会等名 中国四国教育学会 |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|----------------------------|
| 1. 発表者名 井本美穂 |
| 2. 発表標題 大正期の幼稚園における音楽活動 |
| 3. 学会等名 中国四国教育学会 |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 井本美穂 |
| 2. 発表標題 近代日本のキリスト教系幼稚園における音楽活動 大正期の遺愛幼稚園に焦点をあてて |
| 3. 学会等名 中国四国教育学会第69回大会 |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 井本美穂、紙田路子 |
| 2. 発表標題 Importance of Historical Perspective to Facilitate Deep Active learning in Kindergarten and Elementary School |
| 3. 学会等名 The 27th European Early Child Education Research Association Concerence (国際学会) |
| 4. 発表年 2017年 |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|--|---------------------------|-----------------------|----|
|--|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|